ふるさと資料紹介

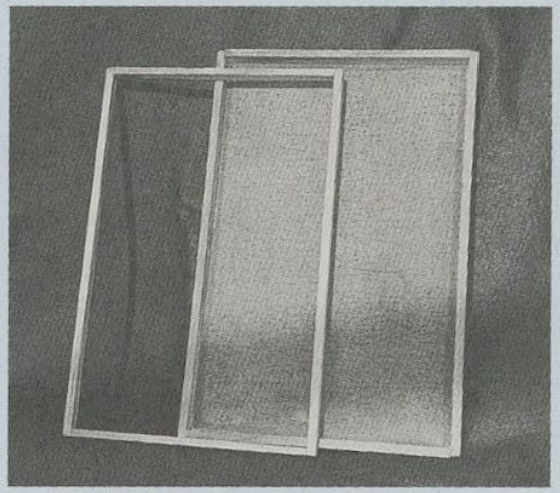
＝86＝

収集資料紹介ノート
ーモノに歴史ありー
（五）催青箱（さいせいばこ）

蚕の飼育を始めるためには、蚕を卵からふ化させなければなりません。蚕の卵をふ化させることを「催青」といいますが、江戸時代には自然ふ化のため、わずかな温度差によって蚕種（さんしゅ）が早く青みがかることがありました。ふ化の調節には注意が必要だったのです。

明治時代になると、温湿度や光を調節して人工的にふ化させる道具が生まれました。それが催青箱または催青器と呼ばれる容器です。

構造はいろいろあるようですが、多くは周囲が木の骨組みで、容器の底にはラシャの黒い布が張ってあり、その上には糸網がついています。この糸網に蚕種をつけ、その上に防護紙と白い紙を覆い、木枠で押さえました。



▲催青箱

今回は、次の方から貴重な資料を寄贈いただきました。ありがとうございました。

（平成十年七月分）

○国防献金受領票
（清水町自治会）

○トワウチ（唐箕）
（可児光男さん／森山町）

○クワツミツメ
（渡辺勝さん／下米田町）

○天火栄養料理器
（齋藤基生さん／多治見市）

○金ドオシ
（佐光義弘／太田町）

博物館建設のため、現在いろいろな資料を収集しています。文化課（文化会館内／☎内四〇八）まで情報をお寄せください。